

Title	漢以前の古鏡の研究(梅原末治著)東方文化學院京都研究所研究報告第六冊
Sub Title	
Author	杉本, 忠(Sugimoto, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.2 (1936. 7) ,p.190(358)- 192(360)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360700-0190

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て活動力の缺乏が彼を失敗に導いたのではなく、その活動力を調整すべき批判力を失つたことが失敗の眞因であるとして全篇の結論としてゐる。

本書を一貫する基調はナポレオンの性格の内面的考察であり、性格の變化が事業の成敗を決定する要因となつたことが明かにされてゐる。偉人とその時代との關係を考察する如何なる論者も、あくまで史實に立脚したる、この秀でた論述によつて省察と裨益を與へられることは多大であると信ずる。終りに、固有名詞の誤讀など多少散見したが、翻譯と氣づかないまでに平明な、こなれた譯文をもしたる譯者に充分の敬意を表したい。(明治書院發行、定價二圓八十錢)(平山榮一)

漢以前の古鏡の研究(梅原末治著)

東方文化學院京都研究所研究報告第六冊

本書は別題を「戰國秦式鏡の性情と銅鏡の起源に就いての考察」と云ひ、支那の古銅器に關して續々と清新にして周緻な研究を發表される著者の近業である。

從來學術的に研究された鏡鑑の沿革は漢代までしか遡り得ず、しかも漫然秦鏡の名によつて呼ばれてゐる漢以前の古鏡の近年次第に發見され増加する状態に鑑み、著者が最近三ヶ年間本邦は固よく遠く歐米に流出した新資料をも蒐め、之に從來より著者の集められてゐたものを合せて約三百面に達した爲、これらの遺品も整理案配して所謂秦鏡の集成圖を作製し、同時に如上の資料に基

く著者の研究と、それによつて導出される銅鏡の起源の問題を開陳せられたものである。

著者は先づ所謂秦鏡を現在所藏してゐる歐米及び本邦の各博物館・美術館并に個人を舉げ、その出土地としては淮河流域及び同流域の安徽省壽州、洛陽金村を主要なるものとし、その他支那の本土以外にあつても、オルドス地方、西伯利亞のミヌシエンスク、トムスク地方、北部朝鮮の樂浪、我九州の三雲から若干の發見が知られてゐることを記し、次いで所謂秦鏡の諸式を分類して、純地文鏡、獸文鏡、連弧文鏡、變様羽狀獸文鏡、變様羽狀獸文鏡、變様羽狀獸文鏡、變様羽狀獸文鏡、禽獸透文鏡、嵌石透變様獸文鏡、金銀錯文鏡、異式獸形鏡を第三群となし、其等の様式觀に於いて、遺品の多いのは細地文鏡と蟠螭文鏡及び變様羽狀獸文鏡諸鏡であるが、これらに前述の諸例を加へると種々の違つた形式に互つてゐて、嘗て一部論者の説いた様に、細緻な地文の上に所謂影繪的な圖像を配した式のみを以て所謂秦鏡の特色の凡てを表したものとなし、或はまた動物の立體的な肉彫がその上に表れてゐないのを強調するが如きことは、その特徴を竭し得たものとする事が出来ない。否寧ろ漢様式などに較べて種々の違つた式の並存と云ふ所に秦鏡様式の特色があること、形式學的に圓形その他四角な鏡が存在し、また表裏二枚を組合せて一の鏡體を形造つた遺品があり、これは漢鏡がすべて圓形であり、形の違つたものは唐代に至つて始めて現れたとする在來普通の見方を全然變改せしめる新事實であること、又形式の多樣を特色としつゝも、これ

ら種々の形式は、大體に於て背文の構成の上で脈絡ある一の形式發展の部分となして居り、鏡背に平面的な圖文を埋めた單純な式が其の形式列の一端に位し、他方前者の面影を地文としてとゞめ乍ら、上に重ね置いた圖文が完全な鏡背の裝飾をなすものに至る各段階を占め、最も發達したものが前漢代古鏡文の或者に接觸する點で、それ等は鏡背文の整美への道程を示したものと云ひ得ること、而して構成の圖文の上では幾何學的の外に禽獸文の著しい點が特色であつて、その手法にまた奇古なものから、優雅な唐草文化への推移の認められることを指摘されてゐる。かくてこの事實即ち所謂秦鏡が、うちに一の長い様式發展の道程を示すものを含んでゐることからも、是等の製作年代を一律に短い秦代に限ることの當らないのは自明の理であり、所謂秦鏡の主なる出土地たる淮河流域の地域的一括遺物には戰國楚代から前漢初一世紀間の類が並び存し、同じく洛陽金村古墓の遺品は周末漢初と云ふ一部の説に大過なく、以上の二ヶ所による考察から所謂秦鏡の實年代は西紀前五六世紀頃から前二世紀末に至る大約前後四五世紀間と觀られ、中でも獸文鏡中の獸鑿夔文鏡などは、古調を帯びた單なる地文鏡等と共に、鏡背文としてなほ整はない初の段階に屬し、また蟠龍文鏡類は其形式が種々の點で年代の確められた前漢乃至漢中期の鏡文と緊密な連系のあるものである所から、最後に來るものと思はれ、多數の實年代は戰國式銅器と並行したと考へられるとされ、従つて秦鏡の名稱は當然新たに戰國秦式鏡若しくは戰國式鏡と改め呼ぶべきであると主張され、既述の如く此の類の形式が、漢鏡にみる定型への過渡的性質を示すばかりでなく、そ

の質料の化學成分に就いて見るも、從來支那の金屬鏡が佳良な白銅質として知られ、漢唐に至る各代各様式を通じ殆んど成分が一定してゐるのに對し、戰國秦式は成分一定せず、又その或者が青銅質を示してゐることも、質の完成への過渡の現象とも解せられるであらうとされ、かやうに戰國秦式鏡が從來知られた完成した形式に先立つ過渡期の特徴を持つものとするれば單に年代上ばかりでなく形式の上からも、支那鏡中の古いものとする根據を與へるものであつて、其の形式の原始的な遺品に於いては圖文としての最も古いものがあり得るわけであり、これは自ら支那鏡の起源の問題に接觸するものであるとされ、併るに形式列の最も單純なものは地文鏡であるが、これは地文を以て鏡背を飾るに當つて、鈕と縁との間に圓く配するのではなくて、本來矩形をした同一單位圖形の無限に擴る性質を持つものを圓いスペースの上に置き、周圍の餘文を自由に除き去ると云ふ、全く便宜圓背に地文を埋めると云ふ形式で、即ち鏡形と布置の文様との間に統一がなく二元的なものを示して居り、しかもその圖文は古銅器群の流をくむものでありながら、他の各種の銅器に見る如く器と圖文との一致を見てゐないのは、此の場合別に鈕のみの圓い素文鏡があつて、それに新に文様を配する意圖の動いた際、かゝる類が現れたと見るべきであらうとし、圓い素文鏡の祖型はスキタイ銅鏡に求められるのではないかとされ、最後に戰國秦式鏡の多様性が、その當時の世相と地方性とを示し、漢代に一つの定型の成立したことは、單なる形式の發展と見る考の他に、漢の統一なる大きな歴史の動きが、此の工藝品の上にも反映したものと解されるとされてゐる。

現在知られ得る限りの資料と、著者の支那古銅器全般に亙る該博な知識との合成である本書が學界の待望を滿すものであることは今更喋々するまでもあるまい。著者苦心の蒐集になる戰國秦式鏡百四十七面の寫眞若しくは拓影は三十九葉の美しい圖版となつて卷末を飾ると共に、専門外の吾人等に對しても無言の示唆を與へるかの如くである。他に二十八の挿圖と集成圖索引並に佛文梗概が付されてゐる。(菊倍判、本文七十二頁、定價七圓五十錢)

近世政治史

(吉村宮男著)
(内外圖書株式會社發行)

今般東大史料編纂官西岡虎之助氏主唱の下に、東大文學部出身の新進學者によつて新日本史叢書全廿五卷が公にせられる事となつた。本叢書は、各時代の經濟、社會、政治、外交、思想、文化の各部門に各專攻の學者をして筆をとらしめ、新考證新體系の下に右せず左せぬ最も學的價値の高い新國史を生み出すとするもので、本叢書が各執筆者及關係者の努力によつて美事完成し、學界に貢獻せられん事を祈つて止まない。その第一回配本として吉村宮男氏の近世政治史(同叢書第十六卷)が最近公にせられた。

一體政治史は史學の中最も早く發達したものであり、一般に史書と謂へば、多く政治史であつたと謂つて差支へない。しかし乍ら從來の近世政治史は『主として當時に於ける幕府及び諸藩・即ち支配階級の政治的組織の記述に重點を置き、その際政治形態を常にその社會そのものと關聯せしめつゝ分析批判すべき基本的

理解の點に尙ほ不十分であつた』が故に、近時新進學徒の間には既に野心的な政治史の出現か待望する聲がつかつた。著者は『表面的に政治のみを社會から遊離せしめ、單に諸制度、諸政策を羅列的に記述説明するのではなく、當時の近世的政治形態の特質を本質的に把握し、それらの制度政策の意義を理解する事』を以て、その殘された課題なりとする極めて妥當なる意圖の下に筆をとられた。即ち吉村氏は、近世中央集權的封建制度下に於ける支配者の最も努力を集中したのが、彼等の社會的、物質的基礎たりし、農村對策及びそれに次いで封建制そのものを動搖せしめる、商品經濟への對策で、その中に近世的政治形態の特質が看取されねばならぬとし、その特質を信長以下の近世的政治支配の中に見出す事に筆を起して、幕政の成立より文治政治の展開、その停頓、及びその崩壞過程を通じて氏の所謂近世政治形態の特質の把握に力められた。その敘述は從來の政治史に未だ見ざる程に社會、經濟史的問題を多く採り上げて、本書の特色となしてゐるが、之を又、近時社會、經濟史方面の研究興隆の一成果とみることもできる。勿論他の見地よりすれば、本書の構成そのものに多くの批判が加へらるるであらうが、讀者は尠くとも本書が現在に於ける少壯學徒間の史觀の一つの反映としてとり上げべきであらう。

著者は本書の敘述に當つて力めて、最近に於ける研究の成果を攝取された事は敬服の外はないが、更に慾を謂へば、第二章第六節『鎖國の形成』に於いて、鎖國の本質は封建的統一者としての幕府がその封建制維持のため當然なさねばならなかつた商業資本